

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	佐々木 雅英
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Assessment of Urinary and Sexual Quality of Life Using the Expanded Prostate Cancer Index Composite in Patients Undergoing Minimum Incision Endoscopic Radical Prostatectomy with Intentional Wide Resection (鏡視下小切開拡大前立腺全摘除術後の患者における EPIC を用いた排尿および性関連 QOL の評価)
	掲載誌 Journal of St. Marianna University 2025; 16: 65-75.
	主査 鈴木 直 副査 榎本 武治 副査 久慈 志保
[論文の要旨・価値] 局所進行性前立腺癌では、従来の前立腺全摘除術では切除断端陽性となることが少なくない。そこで著者らは、鏡視下小切開拡大前立腺全摘除術（以下、鏡視下小切開術）を導入してきた。本術式は、鏡視下小切開法により拡大リンパ節郭清と前立腺周囲組織を広範囲に切除することで高い癌制御効果を得る一方、神経非温存手術であるため、術後の排尿・性機能低下が QOL に及ぼす影響が懸念される。しかし、本術式の術後 QOL を他術式と比較検討した報告はこれまでなかった。本研究では、鏡視下小切開術施行 72 例と腹腔鏡下前立腺全摘除術（以下、腹腔鏡下手術）施行 29 例の計 101 例を対象に、術後の排尿および性機能関連 QOL を比較した。QOL 評価には Expanded Prostate Cancer Index Composite (EPIC) を用い、排尿機能 (UF)、排尿負担感 (UB)、性機能 (SF)、性負担感 (SB)、治療満足度を評価し、加えてパッドフリー率 (PFR) を検討した。評価は術前および術後 1 年間に計 6 回実施した。また、術前 SF スコアの影響を検討するため、多変量解析を行い、年齢との関連も解析した。その結果、UF および UB スコアは全期間で両群間に有意差を認めなかったが、腹腔鏡下手術群で回復がやや早い傾向を示した。PFR は両群間に明らかな差を認めなかった。なお、SF スコアは両群とも術後 4 週で最低値となり、その後改善はみられなかった。一方、SB スコアは両群とも術前と比べ有意な低下を認めず、術式間差もなかった。その理由として、①本症例の対象は高齢者が多く、性欲低下が背景に存在したこと、②対象症例の多くが高リスク前立腺癌であったため、患者自身が機能温存よりも制癌効果を重視していたこと、③術前の十分な説明により患者自身が術後の性機能の低下を受け入れていた等の可能性が考えられた。治療満足度は両群とも術後に上昇し、全期間で差を認めなかった。術前 SF スコアに影響する因子として年齢が最も重要であり、カットオフ値は 67 歳であった。67 歳未満群は 67 歳以上群と比べ SB スコアが一貫して低値であり、術後の性関連 QOL には術式よりも年齢の影響が大きいことが示唆された。鏡視下小切開術群で排尿機能の回復が遅れたのは、骨盤底の神経や筋群を含む切除範囲が広いことによると考えられるが、PFR が腹腔鏡下手術群と同等以上であったことから、排尿機能関連 QOL は概ね維持可能と考えられた。以上より、鏡視下小切開術は標準術式と比較しても排尿・性機能関連 QOL を大きく損なわない有用な術式であることが示された。一方、比較的若年の患者では術後の性に関する負担感が増す可能性があり、術前から十分な説明を行う重要性が示唆された。本研究は、鏡視下小切開術後の QOL を EPIC で系統的に評価した点で医学的意義が高いと考えられる。	
[審査概要] 教育棟 5 階セミナー室 6 において主査、副査 2 名、陪席 6 名のもと審査が行われた。まず申請者による約 20 分間のプレゼンテーションが行われ、良くデザインされたスライドを用いた分かりやすい的確な発表が行われた。約 40 分の質疑では、元来排尿機能が悪い患者が対象になっていることに関する考え方について、治療満足度スコアが全期間を通じて両群間に有意差はなかった理由、術前の SF の違いが術後 QOL 与える影響について、PFR は両群間に明らかな差を認めなかった理由、術前後の治療による QOL 調査に与える可能性、その他多数の質問に関する質疑応答があり、申請者は真摯にかつ的確に回答した。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 申請者は、研究の背景や要点、将来の展望に併せて、本研究の限界に関しても真摯にかつ明確に発表していた。外国語試験は本学位申請論文の参考となる手術に関する論文（Canadian Urological Association 誌掲載論文）の一部を課題として行った結果、読解力はあると評価した。申請者は十分な専門知識と研究遂行能力を持ち、その人柄を含め、学位授与に値する素晴らしい人物であると判断した。	